第 9 回 あいち生物多様性戦略 2020 推進委員会議事概要

１　日時

平成 30 年 8 月 23 日(木)　午前 10 時から正午まで

２　場所

本庁舎　6 階　正庁

３　出席委員

＜あいち生物多様性戦略 2020 推進委員会＞

山本委員長、武田副委員長、荒山委員、稲垣委員、辻本委員、中静委員、福田委員、新海委員、谷定委員、祖山委員、佐藤委員、柳原委員、松井委員（代理　北川生産技術環境課課長補佐)、岩田委員（代理　椙田環境調整官)、酒向委員、田口委員、森田委員（愛知県環境部長）

４　議事概要

１．開会

２．あいさつ

森田環境部長、山本委員長から開会のあいさつ。

３．議事

（１）あいち生物多様性戦略 2020 の進捗状況について

（資料１の説明）

【委員】

資料 1 の最初の表の中で、E-1 と A-2 のところ、順調に進んでいるものが 28 年度から 29 年度にかけて減少しているが、何か理由があるのか。

【事務局】

E-1 の自然との触れ合いの推進について、油ヶ淵水辺公園において水辺の学習館の建築工事が 2020 年までに完了という見込みであったが、施工スケジュールが延びたため、評価を一段階下げた。

A-2、庭に樹木や野草をふやすことによって、生物の生息生育空間や移動経路を消失するという項目は県民の方々主体の取組である。例えばソニーの森の苗木づくりなど活動が行われているが、その広がりが十分期待したほどではないということで、少し厳しい評価に下げた。

【委員】

数値目標⑦の農業施設の整備、目標 100 地域に対してすでに 149 できて目標達成になっているが、県内の整備は終わったという理解なのか。

⑩の油ヶ淵のＣＯＤ、表では低下していない。油ヶ淵の目標のＣＯＤが良かったのかどうか、浚渫をきちっとやらない限りＣＯＤはこれ以上なかなか難しいという気がする。

⑰の県産材の生産量の増大、今の県内の生産能力から 14 万前後が限度なのかどうか。

㉛、戦略を策定している市町村がなかなか伸びてこない。例えば町村会を通じて協力かなにか働きかけをしてみえるのかどうか。

【事務局】

⑦について、もともと 27 年度を目標年次とした計画があり、その後、新たな数値目標としては設定をしていないが、この政策そのものは引き続きやっている。

⑩は、ＣＯＤ値については再確認したい。

【委員】

油ヶ淵については環境部だけでやれない部分が多い。30 年 40 年の大きな課題として取り組んでいるので、戦略をうまく使って、さらに一歩進めてもらいたい。

【事務局】

⑰について、今年 8 月 2 日に豊田市が誘致した大型製材工場が稼働した。林道などの基盤整備を進めるとともに、今年度から ICT を活用したスマート林業にも着手するなど、生産量の増大に向けて全県挙げて頑張っているところである。

㉛について、現在、戦略策定済みは 8 つの市町村である。毎年、事務レベルでは市町村に働きかけているが、町村会を通じた働きかけはできていない。そういうことも含めて、高い立場からの要請をしていくということを検討して参りたい。

【委員】

油ヶ淵の記述は確認をするということと、6.0 ミリグラムという基準が目標としていいのかどうかというふうなことについては検討いただきたい。

【委員】

目標達成はミッションで、やりましたっていうのはわかった。ここで議論や情報提供すべきは、どうやったらあと 2 年で未達成の目標をクリアするかというところ。今年はこれをやりますとかこれを考えていますというのがお聞きしたい。

2 点目は、愛知ターゲット 2020 までＮＧＯもかなり動き始めている。この戦略が愛知ターゲットにどのどれぐらい寄与しているか、弱いところをどうやって強めていくか議論をされているのか。

ＮＧＯの方は認知度が低いというのはかなり課題だと思っているが、認知度は調査されていない。今できてないことは悪いことではなくて、みんなの知恵を出して連携してやればいい。民間にできることをご指摘いただけたらなと思う。

【委員】
非常に重要な問題である。やはり課題になっていることを明らかにして、それを解決していくということが重要だ。

【事務局】
行動計画、数値目標にしっかり向き合っていかないといけない。どういうことが原因になって目標が進まないのか、はっきりさせていくことが必要だと考えている。
昨年度から庁内連絡会議を開催しているほか、個別に各部局、担当課を回り、どういうふうな課題があるのかお聞きしている。多様な主体と連携し、専門家の方のご意見も伺いながら課題解決していきたい。
愛知目標との関係は、戦略 53 ページにおおざっぱな紐づけがされている。ただ、愛知目標に対してどれだけという評価までは行っていない。そろそろ愛知目標との距離感も分析をしていかないといけないと受けとめた。
認識状況の関係では、来年度にでも県民調査を行えるよう調整していきたい。高める取組としては、生態系ネットワーク協議会の活動をうまく生かして普及していくのと、2020 年という大事な節目を皆さんにお伝えしながら、取組を進めていきたいと考えている。

【委員】
認識率 75%はかなりハードルが高い。早めに調査をして、手だてを講じてほしい。

【委員】
生物多様性の認識に関しては時間とともに低下していくのは当然である。あと 2 年半のところで、これから注力しなければいけない。

（２）生態系ネットワーク協議会について
（資料２の説明）

【委員】
知多半島協議会では 29 年度にビジョンを策定し、今年度、ビオトープができた。豊田自動織機さんのアニマルパスは企業のお金で整備し、マスコミ各社でも大きく報道された。

【委員】
１②協議会間相互の連携促進ということで、昨年、西三河協議会の方からご指摘があったが、連携ということを実際にやられているということで、どうもありがとうございます。それぞれの協議会でやられているベストプラクティスを情報交換することにより、さらに高度化できるだろうと思う。

（３）あいちミティゲーションについて

（資料３の説明）

【委員】
マッチングは基本的には意識がある事業者に限られて、別にメリットというのがないのではないか。
もう１点、市町村が行う公共工事においてもアンダーパス等の検討が行われているので、県下の市町村の取組などもここに反映してはどうか。
3 ページの右側の公園関係のところ、枯損木を伐採して切り捨てされているところがかなりあり、被害が助長される。しっかりとしたマニュアルができているか確認してほしい。

【事務局】
事業者のメリットについて、企業の環境の取組の柱として生物多様性保全を入れるという意識が出てきているが、一方で、生物多様性保全と本業との関わりがあまりなく、何をやっていいのかわからないというような状況もある。事業者がＮＰＯと組むことにより取り組みやすくなり、ＣＳＲ報告書などで生物多様性保全の取組も書けるといったメリットがあると考えている。
2 点目の公共工事について、公共工事で自然環境に配慮していくというのは非常に大事だということで、まず県の中でどういう取組がされているかを明らかにした。市町の取組も把握することで県全体の取組が見えてくるので、市町村とも相談しながら検討したい。
カシノナガキクイムシの樹木の伐採後の処理は、基本的には薬剤とか焼却処分になっている。確認して、県として適切な処理をするように今後とも進めていきたい。

【委員】
生態系ネットワークをつくった理由は、地域のいろんな主体が集まって、地域の自然環境を保全し、開発されるときにも最小限に食いとめるために作ったと思う。生態系のネットワークが切れそうになった時にミティゲーションという手法を突っ込んで、開発業者の責任を求めていく。とりあえずは最低限やれる業者さんと協力をしながら、そっちの方向に向かっていきましょうねと言って動いてきたと私は認識している。生態系ネットワークとあいちミティゲーションを組み合わせることがどういう課題があって、本当はこうしたいが今はここだよねというところの報告がもうそろそろあってもいいのかなと思う。
マッチングスキームは、開発事業者が開発メリットを受けた場合に生態系に対してどういう責任を負っていくかというところでのポイントを示し、生態系を持続的に維持するというストーリーだと思う。資料にある愛知県のマッチングは、ＮＰＯと企業がマッチングして社員を出すとか、活動するとか、地域でそういうＣＳＲ的なことをするということだが、それもいいが本来はそうではなかったのではないか。

【委員】
この検討はワーキングでやっている。プロセスの話について今はわからないが、委員がおっしゃっている方向性というのはこれまで皆さんで共有してきているはずで、そんなに大きくずれてないのではないか。

【事務局】
委員がおっしゃった通りのことを我々は認識をしている。ワーキングを始めた時のこのステップ論、第１ステップとして暫定スキームのマッチングをやっていこうということで議論をして、今これをやっているところ。どうやったらネットワークが繋がるかということで、重要な場所で活動する保全団体を抽出しており、これと今年度実施しているＧＩＳを組み合わせていくことで、ネットワークというものがかなり見える化していくと期待をしている。2020 年に間に合うかスピード感の問題はあるが、本当のミティゲーションをやっていくためには経済団体の方のご理解も必要である。今のところステップ１としてこれをやっていこうという整理であることをご理解いただきたい。

【委員】
ワーキングの詳しい議論は、もしよければ直接ワーキングの委員に聞いていただく方がいいかと思う。

【委員】
ミティゲーションで 91 件反映してくださった開発業者がおり、これはすごい財産だと思う。開発事業者が今後どうしたらお金まで払って自然を守るということに移行していくか、マッチングとセットで考えているということか。

【委員】
バンキングを最初検討されていたが、バンキングの課題があり、もう一つブレイクダウンしてという話になったと聞いている。
企業側からすると、結局お金を出せばそれでいいという話になると何もやらなくなり、おそらく投資額は極端に減る。企業が代償するということであるならば、事業の主流化と生物多様性の保全はかけ離れた感覚がある。どうしても今の感覚でいくと森林再生だとかをやりましたという形でＣＳＲレポートに載せた方がイメージはいい。愛知県とかに橋かけしていただけると非常にやりやすいといったところから、こういう方向に一つブレイクダウンしたという認識である。

【委員】
あいちミティゲーション、こういう先進的なことをやっているところは他にはない。11 ヘクタールの森林創出に相当するようなポイントができたというのはとてもいいこと。
一方で、域外代償がまだほとんどない。例えば 2010 年から 2020 年の間にもしやっていたらどれぐらいのポイントが稼げたのか、算定をしておくことが大事だと思う。逆に、実際にはどれぐらい失われたかということの算定をきちんとやっていく必要がある。
もう一つは県工事での緩和の取組、非常に頑張っていただいているなと思う。他の県ではあまり進んでないという状況。例えば実績をどれぐらい把握されているのかお伺いしたい。

【事務局】

117 件について、どの程度だったか我々の方では算定をしている。11 ヘクタールというのは、事業者が持ってきた計画に対してこれぐらい上げてもらったという部分であり、元はこうなっていたところがこうなった、こう上げたという格好になっている。

【委員】
過去の委員会でそのデータは出されていた。後からでも委員に渡して説明をしていただくとよい。

【事務局】
はい。
公共事業の実績は、各部局でどのくらい実績があるか一元的に把握していない。各部局でどういう整理がされているか確認して検討していきたい。

【委員】
そういう数字を出していただけると他の県にも波及効果がすごく大きいと思う。

【委員】
専門家派遣の開発事業に関してのデータは確かあったと思う。
域外代償はお金の問題があってなかなか難しい。例えば近くに川があって、その川と生態系ネットワークを通すために植生をちょっと変えるとか、ＮＰＯの人たちが関わっているのだったらそれに手助けできないかというような話をさせていただいたことはある。
マッチングみたいなスキームができれば、開発事業者の方が人手という社員のボランティアという形でその近くのやっているところに参加するというようなことができればメリットはあるのではないかと思う。或いは開発事業者さんがこれを機にその生態系協議会に入ってくださるというようなことを期待したいと考えている。

（４）平成 30 年度の推進委員会（現地視察）について
（資料４の説明）

４．報告事項
（１）企業の取組
株式会社加藤建設　代表取締役社長　加藤徹氏から、同社の生物多様性保全の取組「エコミーティング」について説明

（２）「愛知目標達成に向けた国際先進広域自治体連合」の取組について
（資料５の説明）

５．その他
【委員】

あいちの未来クリエイト部を紹介する。

2020 年の北京での会合にはぜひ若い人たちが環境の取組をプレゼンできるように応援したいと思う。次の世代が自分たちのまち、生態系ネットワークに関わっていくということも進めていきたい。

【事務局】

生態系ネットワーク協議会でも若い方の力が反映できるよう、各協議会と調整を進めているところである。

【委員】

スーパーサイエンスハイスクールの委員を務めているが、東海地区では生物多様性の発表は 1 件だけと少ない。スーパーサイエンスハイスクールにぜひ応募していただきたい。

【事務局】

次回の委員会は、委員現地視察を 2 月から 3 月に実施をさせていただきたい。別途日程調整をさせていただく。

６．閉会

森田環境部長から閉会のあいさつ